

# 英訳「幻住庵記」をめぐる

小田桐 弘子

## はじめに

本誌第5輯では「英訳歌仙抄―The Monkey's Straw Raincoatをめぐる―」と題して『猿蓑集』の「巻の五」、芭蕉・去来・凡兆・史邦の四人による「鶯の羽ものの巻」歌仙を紹介して、鑑賞・批評をくわえた。今回は同じく『猿蓑集』の次の巻の俳文をとりあげてみよう。「巻の六」は「幻住庵記」、震軒による漢詩「題芭蕉翁国分山幻住庵記之後」と「凡右日記」と題する弟子たちや来訪者の句を記した日記から成り立っている。

英訳『猿蓑集』誕生のいきさつについては、前輯で詳細に述べたのでここではひかえたい。芭蕉の俳文については、その代表ともいえる『奥の細道』の英語訳はドナルド・キーンやマコト・ウエダの名訳により、多くの読者をえているし、今回の共同研究者のマイナー教授の英訳もあるし、仏・独訳はいうに及ばず、他の外国語訳もかなりみられるが、「幻住庵記」の外国語訳はまだ手にしたことはない。『猿蓑集』全訳の試みそのものがまだなされていないので、当然かもしれない。

「幻住庵記」の成立に関して、白石悌三は「幻住庵記の諸本」と題する論文において次のように述べている。

『猿蓑』巻六所収の俳文「幻住庵記」は、芭蕉が門人曲水の幹旋で元禄三年（一六九〇）四月六日から七月二十三日まで滞在した幻住庵についての記である。支考編『和漢文操』によれば、幻住庵に同居した芭蕉と支考の間で、文章に「俳諧の家の筆格を建つべき」事が論議されたという。『猿蓑』はその在庵中に企画され、句集と文集より成る予定であったが、俳諧の文集は先例のない試みであったため、芭蕉の意に叶う俳文が集まらず、ついに断念して「幻住庵記」のみの収録となった。つまりは俳文意識に基づく最初の作文とあってよく、俳書の序跋を除けば、芭蕉が生前みずからの意志で公表した唯一の俳文である。①

「芭蕉が生前みずからの意志で公表した唯一の俳文」を味わうべく、「巻の六」の訳出の方法も前五巻と同様に、初稿を小田桐が担当して、これをもとに原文を再び、マイナー教授と小田桐とで、関連する研究書・先行論文などを座右において、読み合わせ、鑑賞しマイナー教授が第二稿を作成。その後三度、両者で原文のニュアンスを味読しながら、英訳とつきあわせる作業を経たものである。以下、基本テキストとして、『芭蕉七部集』（中村俊定 岩波文庫 昭和四十一）『新潮日本古典集成 芭蕉文集』（富山奏 新潮社 昭和五十三）を主として使用した。英訳文を記しながら、一パラグラフずつ、解説・鑑賞していく。お断りしなければならないが、このパラグラフの分け方はテキストを参考としながら、英文読者にわかりやすくまとめたものである。

なお、本文に入る前に、英訳本では PART SIX : VARIOUS COMPOSITIONS として内容の説明・批評などを加えているが、この解説部は本文中に記すことにしたい。はじめに英訳、続いて原文（岩波文庫版―ただしルビを省略している箇所もある）を写すことにする。

A Record of the Unreal Hermitage  
(Genjūan no ki) By Bashō

Mount Kokubu stands in the depths of Ishiyama behind the rocky fastness of Ishiyama Temple, formerly called Kokubu Temple. Forging the narrow stream that flows along the foothills, traversing the path on its three twists, in some two hundred steps one comes to the Hachimian Shrine. The object of worship there is a holy statue of the Buddha. Only one house, dedicated solely to Shinto, does not favor worshipping the Buddha. But the divinity of the shrine is venerated by those who understand the coexistence of Shinto with Buddhism, and the gracious Buddha bestows benefits on those living on the earth.

石山の奥、岩間のうしろに山有、国分山と云。そのかみ国分寺の名を伝ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして、八幡宮たゝせたまふ。神体は弥陀の尊像とかや。唯一の家には甚忌なる事を、両部光を和げ、利益の塵を同じうしたまふも又貴し。

石山は石山寺をさすが、これについては、「巻の四」の巻軸句「行春を近江の人とおしみける」の句にかかわり、歌枕や紫式部への連想などを述べていることを、注として記した。岩間は西国巡礼第十二番札所で、第十一番札所の醍醐寺から山越えすると、岩間・石山寺で、逆にいくと石山寺の奥に岩間寺があり、その奥に国分山があること

になる。英訳に際して、原文通りに「石山の奥」—the depth of Ishiyama—を冒頭におきたいとも考えたが、英文のコンテキストから、上記のようになった方がよいと思われる。

原文を味わうと、七・八・八語と語調がととのい、流れるように抵抗がないが、「両部光を和やわげ、利益の塵を同じうしたまふも又貴し」のあたりの意味はとくに、現代日本人にもわかりにくいようである。本学の授業などでとりあげた際に、和英ともに読んでいきながら、「両部」に迷う読者がいたが、英文の“coexistence of Shintō with Buddhism”の「コエキズイスタンス」から想像して解けるといふことがあった。

In recent times so few people have come to worship that the place is at once rich in the aura of divinity and an area of great stillness for the grass hut of one who has turned his back on the world. Thick mugwort and bamboo enclose the hut, crowding even the eaves of the leaking roof. Inside the plaster has fallen, and the place has been a lair for foxes and raccoons. Such is the Unreal Hermitage. Its master was a certain priest, uncle of a brave warrior, Suganuma Kyokusui. The priest lived here eight years, now surviving solely in its name, Genjū, the Unreal.

日ひ比ひは人の詣まうざりければ、いとゞ神さび物しづかなる傍に、住捨し草の戸有。よもぎ・根笹軒をかこみ、屋ねもり壁落て狐狸ふしどを得たり。幻住庵と云。あるじの僧何がしは、勇士菅沼曲水子の伯父になん侍りしを、今は八年計ばかりむかしに成て、正に幻住老人の名をのみ残せり。

はじめに幻住庵の地理的場所やその地の古典との繋がりや歴史的由来、そして静かで古びた様子など、また、幻住庵の持主は芭蕉の有力な弟子で、近江膳所藩の重職にあった菅沼定常、曲水の伯父であったけれど、八年ばかり昔に住まなくなってしまう、荒れ果て狐や狸の住むところになってしまった、と述べている。第一パラグラフの「幡宮たゝせたまふ」とか「利益の塵を同じうしたまふも又貴し」の下線部の敬語表現は英語にはならず、gracious Buddha のような形容詞を加えるという具合とした。

It is fully ten years since I left my life in the city and, as I approached fifty, I departed like the bagworm from its bag or the snail from its shell, walking along Kisa Bay in the north country with the hot summer sun on my face, sometimes injuring my heel on sand bars of the rough shore by that northern sea. As if a grebe floating in its nest this year on the waves of the lake nearby, seeking out a safe place for rest among the reeds, I have sought the shade of this hut, where I have renewed the thach on the roof and worked to repair the fence. So it is that as the Fourth Month began I thought to linger on this mountain, thinking like Saigyō at Yoshino, "I shall not leave this little while."

予又市中をさる事十年計にして、五十年やちかき身は、蓑虫のみのを失ひ、蝸牛家を離て、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなごあゆみぐるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波に漂。鳩の浮巢の流とまるべき芦の一本の陰たのもしく、軒端茨あらため、垣ね結添などして、卯月の初いとかりそめに入し山の、やがて出じとさへおもひそみぬ。

芭蕉は延宝八年（一六八〇）に江戸の中心の日本橋から、当時は郊外ともいえる深川に隠退して、元禄三年（一六九〇）までの十年間すごした。その後奥羽から北陸行脚をへて、大垣・伊勢、故郷伊賀・京都から琵琶湖のほとりにいたる旅を経験した。幻住庵に入ったのは四十七歳の年である。「蓑虫のみのを失ひ」とか、「湖水の波に漂」と、いう俳言の調べのよさとともに、辿ってきた厳しい年月の現実を、読者は感慨をこめてしみじみと味わいながら、芭蕉の自己の象徴化と俳諧化を読み取るのである。英語圏の読者のために、このパラグラフでは、西行の「吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ」からの、「やがて出でじ」からの本歌取りと注を付した。

The remembrance of spring was not yet old—azaleas were still in bloom and the mountain wistarias still hung from the pines. Shortly the hototogisu sang, and there was the *kashi* bird that will lend its nest. The woodpecker working on the wood of the hut excites my pleasure rather than resentment.

さすがに春の名残も遠からず、つゝじ咲残り、山藤松に懸て、時鳥しばく過る程、宿かし鳥の便さえあるを、木つゝきのつゝくともいとはじなど……………。

この一節では、幻住庵の自然環境・位置・見晴らしを述べていて、読者にも山辺の春・初夏の雰囲気を伝える。原文には記されていないが、英語訳では、イタリックでしめしている *kashi* については、下注をつけている。“The *kashidori* is here given as “*kashi*” or “lending” bird, based on wordplay and on Bashō’s echo of another poem by Saigyō, Sankashū. すでに、第4・5輯の「連歌」と「俳諧歌仙」の英訳をめぐる諸問題の一つとして、日本固有の動・植物の訳し方については問題提起した。その例として「ほととぎす」も例示して、日本語のままローマ

字化する方針を説明したので、*hototogisu* と表記した。

My spirit seems to run over the southeast, whether toward Wu or Ch'u, as if I were standing beside Lake Hsiang-hu or Lake Tung-ting. To the southwest, Mount Kokubu towers with the houses of villages on its slopes. It is cool here as the southern breeze comes down from that summit or as the northern wind blows across the lake. Mount Hie, the high peak of Hira, and the pines of Karasaki are all hidden in haze. Beyond there are Zeze Castle, Seta Bridge, and boats fishing on the lake. One can hear the voices of woodcutters going to Mount Kasatori and the songs of those setting out rice seedlings in the small paddies of the foothills. As fireflies trace through the darkened sky, the water rail taps its sound, and there is nothing for me to add in praise of the scenery.

そぞろに興じて、魂呉楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ。山は未申ひつじまにそばだち、人家よきほどに隔り、南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城有、橋有、釣たる、舟有。笠とりにかよふ木樵の声、麓の小田に早苗とる哥、螢飛かふ夕闇の空に、水鷄たたくおとの扣音、美景物としてたらずと云事なし。

この一節のはじまりからは芭蕉の中国と中国文化への憧憬がおもわれる。琵琶湖を見下ろして、芭蕉の魂は、はるか中国大陸の東南にある呉楚に走り、身は瀟水湖・湘水湖が合流する洞庭湖に注がれて、その場に立っているよ

うである。廣田二郎の『芭蕉と杜甫』には芭蕉がいかに杜甫の影響をうけたかについての実証的例示がなされ、多くのご教示をうけた。とくに第二節「俳文における杜甫とのかかわり」には、「幻住庵記」を含めた五編の俳文をあげて、克明で実証的なかかわりが述べられている。第一パラグラフの「翠微」の用例についても、『文選』、李白、白樂天からとする先学の注解を辿りながら、「芭蕉が天和貞亨以来愛誦して来ていた七言律詩」②「秋興八首」からで、「翠微」は、芭蕉の杜詩による言語体験を中核として発想されたものと読まれるであろう。」③と述べて、まことに示唆されることが多い。また、「魂呉楚東南にはしり、身は瀟湘洞庭に立つ」に關しても、「登岳陽樓」からの語句と従来いわれていたが、『杜律集解』の「暮春」という律詩にもこの語句があり、「芭蕉がよく目を通していた詩であると知られる。(中略)「身は瀟湘洞庭に立つ」の発想契機の一つとなっていたものと見られよう。」④と実証的に示されている。

歌枕の多用による原文のなだらかさは英語訳にも生かすべく、ヴィジュアルなイメージリーにも心して、初稿から再稿、三稿を味読しつつ、last draftに至った。

Amid all this, with Mount Mikami resembling Fuji in shape, I am led to recall my hut off in Edo and those who in ancient times left their remains here on Mount Tanakami. There are other mountains here — Sasaho' Senjo and Hakamagoshi.

中にも三上山は土峯の倂にかよひて、武蔵野の(の)古き栖もおもひいでられ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽・千丈が峯・袴腰といふ山有。

芭蕉は江戸は深川の芭蕉庵から眺望できた、富士山を思い出しながら、まわりの歌枕の三上山や同じく近江の歌枕である田上山を見晴らしている。

As its name suggests, Kurotsu Village is thick with dark overgrowth and still possesses that elegance it was said to have by the *Man'yōshū* poet who wrote that here they fish with nets of wood and bamboo rather than of cord.

黒津の里はいとくろう茂りて、網代守ルにぞとよみけん萬葉集の姿なりけり。

多くの注釈書等に、「網代守るにぞ」と詠んだ歌は万葉集にはみられないことが記されている。これをやはり下注に記したが、多方面にわたり調べて、次の説明をくわえた。There is no such poem in the *Man'yōshū*. It is by the famous tea master and garden architect, Kobori Enshū (1579-1647). The name “Kurotsu Village” suggests darkness, because “kuro” means “black.”

Desiring to leave no part of the scenery of the area unseen, I struggled into farther recesses of the mountains, where I made a shelf of a pine branch, spread a straw mat for my seat, and named the place “The Monkey’s Seat.” I do not pretend to be Hsü Ch’üan who took his rest on an aronia stump, or Old Wang who set his hermitage on Chu-p’ü Feng. I have just become a nap-taking denizen of the mountains, one leg

dangling over the edge of the deserted precipice, tranquilly picking off lice.

猶眺望くまなからむと、後の峯に這のぼり、松の棚作、藁の圓座を敷て、猿の腰掛と名付。彼海棠に巢をいとなび、主簿峯に庵を結べる王翁・徐佺じよせんが徒にはあらず。唯睡癖山民と成て、孱顔さんがんに足をなげ出し、空山に虱をひねって座ス。

第三節の「北海の荒磯にきびすを破り」ながらの旅に、過ごす日々とは反対に、本節では、まわりの景色をいっそう心ゆくまで眺める様が、ややコミカルといたいほどに記されている。第三節の自然環境の厳しさを雅とでもいいたいような、俳諧語で表現しているのに対して、本節では、「海棠に巢」、「主簿峯」、「王翁・徐佺」、「睡癖山民」、「空山に虱をひねって座」など、漢詩文とのかかわりが多い。

From time to time, as the feeling prompts me, I draw water from a valley spring and cook rice. I know the anguish of "The springhead that drips its sound," near this place with but one fire for cooking. In these surroundings Priest Genjū formerly lived his refined life without worldly affectation. His hut is now arranged with a division made by the Buddha's altar, and in the far part such things as bedding are stored.

たま／＼心まめなる時は、谷の清水を汲て自ら炊ぐ。とく／＼の雪を侘て一炉の備へいとかるし。はた昔住けん人の、殊に心高く住なし侍りて、たくみ置る物ずきもなし。持佛一間を隔て、夜の物おさむべき處などいさ／＼

かしつらへり。

芭蕉みずからが自身の食事を作る暮らしの有様が、この節では西行の本歌取りといわれる「とくくの筆」などを、俳語化し、この一行は、五・七・七・五の語句で成立している。英訳においても、この句はクオーテーションで囲み、この旨に注に記している。

There is a bishop at the temple of Mount Kōra in Kyūshū, the son of a certain Shinto priest called kai no kami at the Kamo Shrine. When he came up to the capital, I used the offices of an acquaintance to request some calligraphy from him. It was no trouble whatsoever for him to ink a brush and write out for me the three characters for “Unreal Hermitage.” I have made it a keepsake of this grass hut.

さるを筑紫高良山の僧正は、加茂の甲斐何がしが嚴子にて、此たび洛にのぼりいまそかりけるを、ある人をして額を乞。いとやすくと筆を染て、幻住庵の三字を送らる。頓て草庵の記念かたみとなしぬ。

前節では家財道具など何もない簡素な暮らしぶりを述べているが、唯一つ「幻住庵」の額がある。これは当時、能筆をもっていられていた、筑後の御井寺五十世座主寂源一如の手になるものといひ、*“I have made it a keepsake of this grass hut.”* とこの庵をいずれ去る気持ちをはっきりと、表すのである。

These circumstances describe what people mean by living in mountain seclusion or in travel. Such life requires no elaborate equipment. On the pillar above my pillow hang only a cypress hat from Kiso and a sedge raincoat from Toyama.

すべて山居といひ旅寝と云、さる器うつはものたくはふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑計、枕の上の柱に懸たり。

前述したように「幻住庵記」に続いて「凡右日記」にこの一節とかかわる発句がある。北枝の「贈蓑」との詞書がついた「しら露もまだあらみのゝ行衛哉」である。芭蕉の「奥の細道」の旅の途中で、北枝が贈ったものである。芭蕉はほとんど何も所有していない現在の幻住庵の生活の中で、「旅人の象徴」⑥である笠と蓑を枕の柱の上にかけているのである。

During the day I give my attention to people who visit now and again — and sometimes to the warden of the local shrine, sometimes to the villagers with tales I had never heard—about the boar that ripped up the rice seedlings he fed among or about the rabbits in the bean fields. As the sun sets below the mountain rim, I peacefully sit waiting for the moon to rise. Finding it already shining, the shadow it casts, as later does my lamp, I make my companion, the two of us consulting about right or wrong.

昼は稀くとぶらふ人々に心を動し、あるは宮守の翁、里のおのこ共入来りてゐのしゝの稲くひあらし、兎の

豆畑にかよふなど、我聞しらぬ農談、日既に山の端にかゝれば、夜座静に月を待ては影を伴ひ、燈を取ては罔両に是非をこらす。

日中には、宮守や里の農夫たちの訪づれを、芭蕉が快く受けとめている様子がリアルに記され、続く「月を待ては影を伴ひ」の語句は雅びですらある。“shadow”を“companion”として人生を思う生活は、読者には毎日の生活の中に形而上性を求めている芭蕉の姿が感じられる。

As what I have said shows, I am not someone who simply likes seclusion or wishes to leave his traces on some mountain or field. But because I am not entirely in good health, I do not mix well with people and resemble a person who dislikes the world. Reflecting on myself over these months and years, I recall that I once envied those holding official positions and that I once thought of becoming a priest. But I drift to uncertain end like a cloud borne by the wind, devoting myself to poetry about this flower or that bird. For although it turns out that I have neither capacity nor talent, this one subject preoccupies me.

かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとはあらず。やゝ病身人に倦て、世をいとひし人に似たり。つらつら年月の移こし拙き身の科とがをおもふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛籬とほそ祖室の扉とほそに入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる。

何と正直な自己告白であろうか。これまでの生涯をかえりみて、はじめから俳諧の道を志したのではなく、武士として、とりたてられることを望んだがはたせず、また、仏門に入り、禅寺で修行さえしたけれども、挫折したことを現在の心境から告白している。このことは芭蕉が「この道や往く人もなしに秋の暮れ」というような、ある境地に達していることを示していると思える。

I have reflected: Devotion to poetry gave Po Chi-i pain throughout his body and made old Tu Fu haggard. There is no comparing my poor abilities with their literary genius, but do not we all live in the realm of unreality? So I freed my mind of entangling thoughts and went to bed.

楽天は五臓の神をやぶり、老杜は瘦たり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやと、おもひ捨てふしぬ。

白楽天が詩作のために五臓が破れるほどに苦しみぬいた事をふまえている。「老杜は瘦せたり」の一節についても、芸術創作の厳しさを深く意識してのことばとよめる。白楽天や杜甫のような天才と自分のような“poor abilities”と、謙虚に、同列には比べられないけれども、といいつつ、われわれすべては、この世、すなわち、幻の栖に住んでいるのではないか、と終えている。「おもひ捨てふしぬ」の「ふしぬ」の英訳“went to bed”はいささ疑問であるが、「臥す」の意にとり、この訳とした。

1 Mazu tanomu For first inquiry

shii no ki mo ari there is at least an oak tree

natsukodachi a grove in summer

先たのむ椎の木も有夏木立

この発句をもって「幻住庵記」は終わるのであるが、英文テキストには句の初めにナンバー「1」としている。その意味は続く震軒の漢詩のあとに、発句集「凡右日記」三十五句が続いているからである。去来と凡兆の編集による芭蕉へのオマージュともいえる『猿蓑集』の俳文の末句は、すなわち続く発句集の初まりとして、英訳版には下註にこのように記した。発句「先たのむ」の訳し方としては、語順は原句の通りである。

### Shinken's Essay in Chinese Prose and Verse

On Our Old Master Bashō's

*Record of the Unreal Hermitage*

At Mt. Kokubu

In no age has the world been without recluses, and in ours there is one whose spirit has imparted wisdom to the lonely place. Similarly, there is no place in the world without its lovely peaks and streams, and those of the place have taken on beauty by the cultivation of the person who beheld it. While reading our Old Master's essay on the Unreal Hermitage, I realized that he possesses the soul of reclusion and that in his writing the scenery has found a person to know it rightly. So it is that this person and the natural scene have taken on full existence in their mutual relation.

To the south of Lake Biwa there rises the peak of Mt. Kokubu  
Where old pines cluster and the green shade is fresh.

A modest hut stands there, no more than a few steps square,  
And in it lives a superior person, nourishing his being.

His rich expression constantly brocades the hills and streams,  
So that the scenery becomes spiritualized into a poetic castle.

This area has always been known for its famous places,  
And now because of him this spot has unusual splendor. ⑦

On the day of the harvest moon, Eighth Month, 1690.  
with all respect,

## 題芭蕉翁国分山幻住庵記之後

何世無隱士。以心隱爲賢也。何処無山川。風景因人美也。間読芭蕉翁幻住庵記。乃識其賢且知山川得其人而益美矣。可謂人与山川共相得焉。廼作鄙章一篇歌之曰。

琵琶湖南兮国分嶺 古松鬱兮緑陰清

茅屋竹椽纒数間 内有佳人獨養生

満口錦繡輝山川 風景以稀入誹城

此地自古富勝覽 今日因君尚益榮

元禄庚午仲秋日

震軒具艸

震軒は去来の兄、向井元端で儒医である。「具艸」とは草稿を書くことであるが、震軒は「幻住庵記」の推敲に関して弟去来に次のような手紙を送っている「このかみの御ぬしへ御尋可被下候。誹文御存知なきと被仰候へ共、実文にたがひ候半は無念之事に候間、御むつかしなから御加筆被下候へと御申可被下候」。⑧  
 続いて、三十五句による「凡右日記」をみていきたい。

The Diary by His Side  
(KIYŪ NIKKI)

2 *Kyokusui*

Hototogisu	Hototogisu
senaka miteyaru	I look down upon your back
fumoto kana	there in the foothills

時鳥 背中みてやる 麓かな 曲水

この句は「幻住庵記」の終わりの芭蕉句から、庵の主にかかわる曲水が「凡右日記」の初まりをうけたのである。英語圏読者のために、次のような解説を加えた。

Although some take the meaning to be the backs of the foothills and others the backs of us poets, we take the simple interpretation: the bird is singing in flight beneath Mount Kokubu, where Kyokusui's hermitage stands. As with renga and haikai sequences, he begins, being host—except of course that to make the proper thirty-six stanzas for a kasen, we must include Basho's in his Record: hence we renumber, starting with that as 1, this as 2, etc. Basho's hokku has the same summer season as this.

以下第3句からは限られた紙数のため、原本の形式を改めて各句を一行で表すこととする。

3 *Yasui*

Kussame no ato shizuka nari natsu no yama

A sneeze from a chill/ and afterwards all is silence/ among summer hills

くつぢめの跡づか也 なつの日

野水

この句はくしゅみの音の後の静かさど、やや滑稽さが「くつぢめ」から思われ、その後の反動のようなシーンとした、雰囲気が伝わる。 This is a Bashō-style aesthetic principle, as in his hokku at Ryūshaku Temple in the *The Narrow Road*: “In seclusion silence/striking into the mountain rocks/the cicada’s rasp.” 「閑ひぢぢ 岩に沁いる 蟬の声」や、「巻の三 秋」の凡兆の「物の音ひとりたふる 案山子哉」に通じる世界という解説を付した。

4 *Kyorai*

Niwatori mo barabaradoki ka kuina naku

Along with the cocks/ crowing now and then at dawn/a rail raps its sound

鶏も ばらばら 時々 水鶏なく

去来

英語圏読者には「ばらばら」なる表現がわかりにくいという、きついで“Barabara-” is an expression for cook cries used just at this time, apparently to mean “now and then,” at various farmhouses in the vicinity. 「水鶏」は先の翁の「幻住庵記」にも登場していて、翁の仮住まい場所への共通する思いがある。

5 *Bonchō*

Umiyama ni samidare sou ya hitokurami

From lake to hills/the summer rains bring on their way/one sudden darkness

海山に 五月雨そよよ 一へらみ

凡兆

一九

この句では海山に五月雨が「そふ」という、俳諧語としては、いいえて妙でその有様は目に浮かぶ。しかし英語圏読者にとっては、「添う」という言葉のニュアンスとしては、擬人法表現である。つぎのような解説をふした。“Such darkness may not last long but seems ominous. As so often, a stanza by Bonchō (like those by Bashō and Kikaku) stands out. Here the waters-land contrast of 3 is explicit, and the order of imagery is reversed to sight and then sound.”

6 *Senna*

Noki chikaki iwanashi oru na saru no ashi

Here under my eaves/don't break off my sandberries/watch your feet monkeys

軒ちかき 岩梨おるな 猿のあし

千那

すでに本輯前巻で和歌・連歌・俳諧・などの翻訳の問題の一つとして、日本独特の動植物などで、その物自体が存在しない場合、また“hotogisu”のように、和英辞書で“cuckoo”と記されているも、“cuckoo”の英詩における poetic diction として、滑稽なイメージを持つ場合がある、などについて実例とともにあげている。この第六句にも、「岩梨」という果物については、調べてみて京都や近江辺の“dialect”、即ち方言で「こけ桃」を指すということがわかり、上記のように“sandberries”とした。

7 *Chinseki*

Hosohagi no yasumedokoro ya natu no yama

With your thin legs/here is a place for you to rest/the hills in summer

細脛の やすめ処や 夏のやま

珍碩

この句には珍碩が芭蕉に、長旅でやせ細った脛を涼しい幻住庵で、ゆつくりお休みいただきたいと願う気持ちがこめられている。

8 *Yakei*

“On giving a paper mosquito net as present”

Omou koto shichō ni kake to okurikeri

“Whatever you feel/write it on this paper netting”/I say with this present

「贈紙帳」 おもふ事 紙帳にかけと送りけり

野径

七句と同様に弟子の師への思いやりがうかがわれる。

9 *Ritō*

Itsu takite fuki no ha ni moru obukuzo mo

When did he cook/the rice placed on butterburr leaves/here on the Buddha shelf

いつたきて 露の葉にもる おぶくぞも

里東

「おぶく」とは、英訳でわかるように佛前にそなえるご飯のことである。

10 *Otokuni*

Hotaru tobu tatami no ue mo koke no tsuyu

Fireflies take flight/ over tatami mats that share/dew upon mosses

蛍飛 畳の上も こけの露

乙州

幻住庵記の本文中に、「蛍飛びかふ夕闇の空」と記されているが、山奥の庵には部屋の内部の畳の上にも蛍がと

び、風流な様である。

11 *Dosui* (Of Zeze)

*kanbase ya mugura no naka no hanautsugi*

How like a human face/there where the goose grass grows rampant/white hydrangea flowers

顔や葎の中の花うつぎ

膳所 怒誰

「花うつぎ」の英訳に関しては、前の巻で説明をしているが、小論では初めてで、英訳“hydrangea”はなんとも無粋な、植物図鑑のコメントのようである。「巻の四」の句の説明をここで加えたい。“U no hana” or utsugi (*Deutzia Crenata*) is not a hydrangea but a stark white flower whose petals group somewhat like hydrangea blossoms. As an early summer flower, its budding tells that spring is all but done.

膳所の怒誰は江戸勤めの曲水に代わり、翁の日常的な世話をしていた。顔とは芭蕉の尊顔を拝し、葎のなかで、白い卵の花のようでございます、というように読み取れる。この句のように、琵琶湖辺の弟子たちが幻住庵に芭蕉を迎えて、いろいろな形で、また喜びにみちてお世話をし、暖かい思いにみちていることを、比喩的であったり、象徴性をもって発句が表現され、記している。それが「凡右日記」である。

12 *Tanshi*

*Tadotadoshi mine ni geta haku satsukiyami*

With unsteady steps/I walk to the hilltop in tall clogs/the dark summer rains

たどろろし 峰に下駄はく 五月闇

探志

この句もまた、実際の暗闇だけではなく、俳諧の道を暗示しているともとれる。

13 *Genshi*

Gowa rokuwa io torimawasu kankodori

Five or six of them/encompass the hut while singing/hototogisu

五羽六羽 庵とりまはす かんこ鳥

元志

十二句と同様に、かんこ鳥がなく実景もあり、五羽六羽とは五・六人の弟子でもある。

14 *Deido* (Of Zeze)

Kitsutsuki ni watashite akuru kuina kana

The woodpecker begins/as dawn at last brings a hushing/of the rail's constant tap

木つゝきにわたして明る 水鶏哉

膳所 泥土

幻住庵記に「木つつき」も「水鶏」も登場するし、曲水の句で「幻住庵山上 木つつきの柱をつつく住居かな」があり、土地の自然の風物への親近感がうたわれている。

15 *Fumikumi*

kasa aotsu hashira suzushi ya kaze no iro

The rainhats astir/hanging on the cool pillar/the color of wind

笠あふつ 柱すずしや 風の色

史邦

「幻住庵記」の柱にかけている檜笠を煽って吹いている緑の風が読者にも涼しさをおくってくれようである。

16 *Seishū*

Tsuki matsu ya umi o shirime ni yūsuzumi

We await the moon/so the lake lies off to our side/as the evening cools

月待や 海を尻目に 夕すずみ

正秀

17 *Ryūjin* (Deceased)

Shizukasa wa kuri no ha shizumu shirumizu kana

All is silence/a single chestnut leaf subsides/into the spring

しずかさは 栗の葉沈む 清水哉

亡人 柳陰

18 *Jokō*

Suzushisa ya tomo ni kome kamu shiigamoto

Wonderful coolness/with friends I eat unblended rice/at the foot of the oak

涼しさを ともに米かむ 椎が本

如行

「幻住庵記」の終り即ち、この「日記」の発句の椎の木の下につどう、弟子たちを彷彿とさせる一句である。

19 *Bokusui* (Of Zeze)

“On visiting and finding the person absent”

Shii no ki o tagaete naku ya semi no koe

The trunk of the oak/taken into their embraces/the cries of cicadas

「訪に留まなり」 椎の木を たがへて啼くや 蟬の声

膳所 朴水

20 *Shinn* (Of Tarui in Mino [present Gifu])

Me no shita ya te arau hodo ni umi suzushi

Here before our eyes/as if set out for washing hands/the cool lake water

目の下や 手洗ふ程に海涼し

美濃垂井 市隠

英訳解説には “Seemingly smaller when seen from the mountain, Lake Biwa is treated as a stone basin for washing hands.” とした。市隠もまた、先の如行とともに庵を訪ねての、実感であろう。

21 *Hanzan*

“Written in a letter”

*Zezemai ya sanae no take ni yūsuzumi*

The fine Zeze rice/you must have seen how it has grown/to bring evening coolness

「文に云ひす」 膳所米や 早苗のたけに夕涼

半残

22 *Shidō*

“Giving a present of parched sweet barley flour”

*Hitofukuro kore ya Tobata no kotoshimugi*

One bagful it is/here you have from Tobata/this year's parched barley

「麦の粉を土産す」 一袋 これや鳥羽田の 今年麦

之道

今年麦とは今年収穫した新麦を粉にしていりやきにして食する昔懐かしい「麦焦がし」の事で、スナック菓子氾濫の現代、多くの学生たちは食したことも、みたこともないといい、英訳“sweet barley flour”により想像できた。二十一句の膳所米に鳥羽田の麦と対応して、翁への心配りがほほえましく感じられる。

23 *Rochō* (Of Nagasaki)

“In a letter”

Ichige iru yama sabakari ya tabinezuki

To spend the whole summer/in enjoyment of those mountain/you like nights in travel

「書音」 一夏入る 山さばかりや 旅ねずき

長崎 魯町

24 *Kyūken*

Yudachi ya hinoki no kaza no hitoshikiri

The sudden summer rain/with it comes the smell of cypress/all in one strength

夕立や 檜木の臭の 一しきり

及肩

25 *Shōhaku*

“Going up to the Monkey’s Seat”

Akikaze ya Tanagamiyama no kubomi yori

The wind of autumn/down from Mount Tanagami’s/hollowed out top

「昇猿腰掛」 秋風や 田上山の くぼみより

尚白

26 *Hokushi*

“Presenting a sedge raincoat”

Shiratsuyu mo mada araminno no yukue kana

The bright chill of dew/has yet to settle on this coat/as it goes afar

「贈蓑」 しら露も まだあらみの へ 行衛哉

北枝

27 *Bokusetsu*

Bokuri nugu waki ni oikeri tade no hana

The clogs set aside/and by them in profusion/the nettles in flower

木履ぬぐ 傍に生けり 蓼の花

木節

28 *Sen* (Of Zeze)

“A letter with a sewn paper bag”

Nui ni kosu kusuribukuro ya hagi no tsuyu

Sewn for presenting/this medicine sack for travel/the dew on bush clover

「包紙に書」 縫にこす 藁袋や 萩の露

膳所 扇

29 *Chigetsu*

Ine no hana kore o hotoke no miyage kana

The flowers of rice plants/let me present to the Buddha/this small offering

稲の花 これを仏の 土産哉

智月

30 *Uko*

Ishiyama ya yukade hata seshi aki no kaze

Ishiyama so near/but after all I could not go/now the autumn wind

石山や 行かで果せし 秋の風

羽紅

凡兆の妻の羽紅と女流三句が続き、いずれも芭蕉への深い敬愛がこめられている。

31 *Shabō*

Oke no wa ya kirete nakiyamu kirigirisu

The hoops on the tub/when they broke so did the cries/of autumn crickets

桶の輪をきれて鳴きやむ きのきりす

昌房

32 *Kasho*

Sato wa ima yūmeshidoki no atsusa kana

The villagers now/at the time of the evening meal/are filled with the heat

里は今夕めしごきのあつさかな

何処

33 *Etsujin*

Naku ya itodo shio ni hokori no tamaru made

The crickets cry on/dust on the salt in the kitchen/builds up in silence

啼やいとしよ 塩にほこりのたまるまで

越人

34 *Tōsai*

“Meeting with Etsujin on this same journey”

Hasu no mi no tomo ni tobiru iori kana

With the lotus fruit/I have flown along together/to this hermitage

「越人と同じく訪合て」 蓮の実の 供に飛入 庵かな

等哉

35 *Ranran*

“At the hermitage in the Third Month, 1691”

Harusame ya arashi mo hatezu to no hizumi

The spring rains fall /the hut is not yet ramshackle/though its warped door sticks

「明年弥生尋旧庵」 春雨や あらしも果す 戸のひびみ

嵐蘭

36 *Sora*

“The same summer”

Suzushisa ya kono io o sae sumisuteshi

For all the coolness/in spite of such a hut as this/he left it behind

「同夏」 涼しさや 此庵さへ 住捨てし

曾良

曾良は芭蕉がこのように涼しい、憧憬する杜甫を惟うこの地すらも永住することなく、まさに幻の住家であったということを感じ深く、詠んだ。「奥の細道」のお供をした弟子ならではの拳句であろう。

最後に丈草による漢書の、正竹之書、京寺町二条上ル丁井筒屋庄兵衛板と記した「跋文」をもって、「卷之六」 「猿蓑」全巻は終る。丈草の跋文はすでに制限枚数をこえているので、残念ながら割愛する。⑨

## 終りに

筆者がおよそ二十五年前にマイナー教授と共同で研究・鑑賞し、協同して英訳・出版した「幻住庵記」の再検討を自分に課す目的で、「記」と続く震軒の漢詩、「凡右日記」を味わってきた。その後、日本における研究もすすみ、

白石悌三・上野洋三校注の『芭蕉七部集 新日本文学大系』も刊行されて、今回の再鑑賞には教示をうるところが多々あった。英訳についての諸問題を、俳諧の場合と比べてみることもひとつの眼目であり、文中にふれることができた。前掲書の中で、白石悌三は「幻住庵記は俳文の格を確立した」<sup>⑩</sup>と、述べている。マイナー・オダギリ詠がこの「俳文の格」を十分に確立できたか否かは、読者のご判断によるであろう。筆者としてはもう一度、客観的に読み直すことができた。「奥の細道」の虚構性が「曾良日記」との対照の結果、研究者により角度をかえて、それ以前とは異なった、読み方もなされている。「幻住庵記」にはすでに文中に記したが芭蕉がそれまでの生き方を、しみじみとあるいは、痛切に思えるほど率直に、しかし、一種淡々と、振り返っている趣きや、心象風景がうかがわれる。

其角の序、「巻の一」の「冬 初しぐれ 猿も小蓑を ほしげなり」に初まる発句集、四つの歌仙―冬・夏・秋・春と当時の読者の意表をついたであろう配列―の連句集・幻住庵記・漢詩とあらゆるジャンルをそろえての『猿蓑集』は、蕉風俳諧の妙味と、まさに初心者にとっては、入門の書であったであろう。ということも、再吟味によつて四半世紀前に味わえなかつた部分もふくめて、自省とともに実感できた。

## 注

- ① 白石悌三『芭蕉七部集』解説（新日本古典文学大系 七〇） 岩波書店、一九九〇年三月、五八四ページ
- ② 廣田二郎『芭蕉と杜甫 影響の展開と大系』有精堂出版、一九九〇年一月、二六二ページ
- ③ 前掲書 ②に同じ二六三ページ
- ④ 同 二六四ページ

- ⑤ 同 二七三ページ—四
- ⑥ 前掲書 ① 三四六ページ
- ⑦ 漢詩の英訳については、マイナー教授が“ACKNOWLEDGEMENTS”に記しているように、プリンストン大学東アジア学部の同僚で、中国文学の専門学者の Andrew Plakes 教授が特に私たちの最終原稿と、オリジナルとをつきあわせ、ご教示くださった。通称アンデイは学部も大学院もともにプリンストン大学でおさめ Ph.D をえて後に、母校で教育・研究にあたっている。日本にも東大の招聘研究者としてこられた。学部時代にプリンストン大学では、中国メジャリストは必ず日本語を副専攻として、履修するシステムになっていたが、主専攻といっても、通用するほど日本語の理解力・応用力がある気鋭の研究者で、多くの詩学・詩論上の諸々も提言していた。本稿にも記して、感謝したい。
- ⑧ 前掲書 ①に同じ 三四八ページ
- ⑨ 小論の英訳「猿蓑集」からの引用部分の原本は以下の通りである。  
*The Monkey's Straw Raincoat and Other Poetry of the Basho School* introduced and translated by Earl Miner and Hiroko Odagiri, Princeton University Press, 1981,2,,p.307-325
- ⑩ 前掲書 ①に同じ 二五八ページ